韓国研修報告書

氏名　佐藤　大歩　　学籍番号　22A068

自分たち愛知学院大学薬学部の生徒計 12 人は韓国の明洞に四日間滞在し、韓国の文化や生活様式、韓国の薬学・医療現場の現状を学習しました。今回自分が韓国研修に参加した動機の 1 つは単純な好奇心で学生のうちに韓国の病院、ドラッグストア、製薬会社の現場をこの目で見ることができる良い機会であると考えたからである。研修では、少ない時間ではあったものの現場で活躍している人たちのプレゼンテーションやインタビュー、他にも韓国の薬学生との交流を通じて、日本にはない韓国の今を触れることができた。

韓国での日常生活・生活様式

自分たちは主にソウル近辺で研修を行い、明洞に滞在しました。韓国に着いたときに初めに思ったことは街並みがきれいでより高層のビルが多かったことだ。自分の期待以上の近代的な都市であり、自分たちが普段住んでいる名古屋よりも栄えているのではないかと思うほどであった。だが一方で、街を散策してみると出店が多かったり、客引きを必ずといって良いほどやっているお店が多かったのも衝撃的であった。食生活においても日本と比較するとまず食べる量が多いことが印象的で物価もその分高値であると感じた。韓国では日本と同じように箸を使って食事をするのだが、韓国の箸はステンレス製の平べったいものを使っているところが多く、日本の箸を使い慣れている自分にとっては「よくこの箸で食べることができるな」と感じてしまうほどに食べにくかったのも思い出の 1 つでした。

韓国の研修先について

研修では、韓国の薬学生との交流、漢陽大学病院、GC Biopharma（韓国の製薬会社）、韓国のドラッグストア、漢方市場、医療博物館などの訪問を行い、韓国の薬剤師について学習しました。まず始めに話を伺って驚いたことは日本と比べて薬剤師の人数が少ないことでした。日本の大学病院では 50～60 ほどの薬剤師がいるが漢陽大学病院では 29 人と半分ほどしかおらず、業務内容は日本と同じで処方箋の数や 1 日に対応する患者さんの数もほとんど同じであるため、相当激務であることがうかがえました。韓国の男性は二年間兵役につかなければならないという義務があり、そのうえ韓国の薬学大学は日本とは異なり、入るのが難しい上に卒業までも多くの努力が必要となるため、学生でも三十歳前後の人で優秀な人が多くおられました。そのため、まだ大学二年生の自分にとっては韓国の学生さんと交流するときに自分よりも十歳近く年上の人と話すことが多かったため、最初はとても緊張してしまい、ちゃんと英語が伝わっているかなと不安になってしまうこともありました。しかし、韓国の学生さんが気軽にコミュニケーションをとってくださったため、楽しく交流することができましたし、お話をする中で得られたものがたくさんありました。その一つとして日本でもチーム医療が進んで薬剤師はよりその専門性を求められてきているが、韓国ではそれだけでなく経営学や経済などを学び、起業したり自分の薬局を持つ人が成功していて、世の中に求められていることを聞きました。ただ薬剤師として仕事をするのではなく、薬

剤師になって何がしたいのか、何を専門とするのか、そのために自分たちはどういったことを学習していくべきかなどが大切であるように感じました。他にも、韓国の薬剤師も日本と同様に服薬指導を行うが、自分たちが訪れた薬局の方は服薬指導には①アイスブレイキング（患者さんと打ち解ける）、②事実確認（患者さんの情報や状況を確認）③デリバーリングインフォメーション（情報の提供）④コンフォーメント（確認）⑤フェアメール（ご挨拶）の五段階があり、特に①が最も重要であると伺いました。つまり、患者さんとのコミュニケーションです。共感して寄り添い聞くことが薬剤師として最も大切であり、日本であっても韓国であっても、どの職種であっても変わらないのだなと思いました。

研修を通して感じたこと・今後の自分の進路に生かしていくこと

今回の研修を通して、日本とは違う韓国の文化や生活、医療現場、薬学生の実態など多くの面で得られるものがあり、自分にとってとても良い刺激になりました。特に、この四日間英語を使ってコミュニケーションを行ったが、うまく言葉を伝えられないことが多くて、今までなんとなく英語を学習してきたことを後悔しました。研修を終えて、初めて英語を真剣に学んで話せるようになりたいと考えるようになったし、いろんなことを聞いて自分のスキルを磨くために学校で習っていることだけでなく、英語や経営、経済、放射能、衛生、感染症など薬学に関する様々な分野を学校の授業と同時に学習していきたい。時代は変化していて自分たちが社会に出たときに薬剤師免許を持っているだけでは通用しないことも考えられるため、学校の授業だけで満足せず、自分でそういったことを学習する機会をこれから作っていきたいと思います。

最後に、今回の研修のために準備してくださった先生方やお金を援助してくださった方々には感謝しかありません。

ありがとうございました。